

# 育児期の母親の育児受容感に関する調査

佐伯 まゆみ\*・小林 寿江\*\*・大木 桃代\*\*\*

## A survey of attitudes and opinions regarding child-care amongst active mothers

Mayumi SAEKI, Hisae KOBAYASHI, Momoyo OHKI

### 1. 背景

近年、核家族化や少子化などによってもたらされた家庭の育児機能の低下や、実の母親による児童虐待事件の増加から、育児期の母親への支援の必要性が強く唱えられるようになってきた。政府は2009年までの次世代育成支援対策として、「子ども・子育て応援プラン」を掲げ、各都道府県に子育て支援センターを設置するなど、地域全体で子育てを支援する基盤の形成を図る具体的な施策を行っている。また、子育て支援を行うNPO団体も増加し、母親同士のつながりやボランティアなどによる情緒的サポートをもたらすような支援を行っている。しかしながら、このような取り組みにも関わらず、児童相談所における児童虐待の相談件数は34,451件と前年に比べ1,043件（約3%）増え、増加の一途をたどっている（厚生労働省, 2006）。また、中には虐待行為に至らないまでも、育児不安や育児ストレスを訴える母親は多く、未就学児童をもつ母親では約53.9%がそのようなネガティブな感情を抱きながら育児を行っている（内閣府, 2007）といわれている。

このような問題に対する研究においては、主に母親の育児ストレスや育児不安というネガティブな心理的側面に焦点が当てられている。清水（2001）は育児環境に対するネガティブな感情に焦点を当て、「子育てに伴う不安感」や「子どもに対するコントロール不可能感」等の9因子33項目から成る育児ストレス尺度を開発した。また、育児不安に関する研究では、武井・寺崎・門田（2006）が幼児の気質特徴と養育者の育児不安の関連性を検討し、幼児の「否定的感情反応」や「神経質」といった気質特徴が育児不安に影響を及ぼしていることを明らかにした。平海（2006）は、乳幼児健診で見られる母親の育児不安の様相を検討し、乳幼児健診の内容によっては不安を増大させてしまう危険性を考慮して、健康志向型の観点に立った乳幼児健診の必要性を述べている。

育児におけるネガティブな要因を改善するような支援は確かに必要であり、児童虐待や重度の

\* さえき まゆみ 文教大学大学院人間科学研究科  
\*\* こばやし ひさえ 文教大学大学院人間科学研究科  
\*\*\* おおき ももよ 文教大学人間科学部

ストレス・不安を抱えた母親にとっては最も有効な介入法といえる。しかし、それほど重度な問題を抱えていない多くの母親たちは、日常的にある程度のストレスを感じながらも、同時に育児を通しての楽しさや喜び等、ポジティブな側面も持ち合わせている。そのような母親たちに対して、ネガティブな要因に着目する支援は、育児へのマイナスイメージ等のネガティブ側面を助長させてしまったり、育児に対する視野を狭め、ポジティブ要因に気づきにくくさせてしまうという危険性も考えられる。大野・吉村（2001）によると、精神科受診者に対して治療的アプローチを考える場合、精神症状が顕著でネガティブ感情が強い場合には、まずその回復が治療の目標となるが、精神症状が改善してくれば、ポジティブ感情に働きかけることも必要であるという。それは、ネガティブ感情とポジティブ感情は必ずしも相関するわけではなく、ネガティブ感情を感じるストレス状況でも、ポジティブ感情を感じることができれば、充実した日常生活を送ることのできる可能性があるからであるという。したがって、この考え方を参考にすれば、それほど重度な問題を抱えていない母親たちに対しては、ポジティブな側面に着目した支援の方がむしろ有効であると考えられる。

育児のポジティブな側面に着目した研究は未だ数少ないが、その中には、母親の育児幸福感や母親役割受容感、自己受容感に関するものが散見する。例えば大日向（1988）は、母親役割受容感、子どもに対するプラスの感情と関連性が高いということを明らかにしている。また、山口・森元・鈴木・丹治・大松（2000）は、母親の自己受容と子ども受容の関連性を検討し、自己受容度の高い母親は子どもの受容度も高いという結果を示している。

自己受容感とは、Rogers（1944）によると、自分の長所も短所も納得して自分だと受け入れる感情であるとされ、さらに上田（2002）は、自己受容することにより、自分自身に肯定的な感情を持つことができると述べている。したがって、育児に対しても、母親が育児を受容的に捉えることが肯定的な育児感につながると考えられる。しかし、育児全体を受容的に捉えるには、自己や母親役割といった部分的な受容感についてだけでなく、子どもや子どもとの関係、母親を取り巻く環境への受容感などの視点も考慮しなければならない。そこで、本研究では、これまで扱われてきた一部の受容感に、子ども・子どもとの関係・母親を取り巻く環境への受容感を加え、これを「育児受容感」と定義する。

## 2. 目的

本研究では、母親の育児全体に対する受容感を「育児受容感」とし、その構成要素である「母親としての自分」、「子ども」、「子どもとの関係」、「母親を取り巻く環境」各々に対する現在の受容度や満足度を調査し、以下の仮説を検証するとともに、「育児受容感」の内容を具体的に把握することを目的とする。対象は、特に育児に時間と手がかかるとされる就学前の乳幼児（0～5歳児）の母親とする。そして、最終的にはそれを参考に、母親の育児受容感の程度を客観的に捉え、ポジティブな育児感を高められるようなプログラムを考案する際の手がかりとする。

仮説1：「母親としての自分」を受容しているほど、「母親としての自分」に対しても満足している。

仮説2：「母親としての自分」に対して満足しているほど、「子ども」に対しても満足している。

### 3. 方法

#### (1) 調査時期

調査時期は平成19年12月であった。

#### (2) 調査協力者

埼玉県の子育て支援ネットワーク施設を利用している0～5歳児の母親32名を対象とした。母親の平均年齢は31.9歳であり、20代（23～29歳）10名（31.3%）、30代（30～39歳）19名（59.4%）、40代（40～41歳）2名（6.3%）、無回答1名（3.1%）であった。就業状況は、正社員1名（3.1%）、専業主婦30名（93.8%）、その他1名（3.1%）であった。家族構成は核家族28名（87.5%）、複合家族3名（9.4%）、その他1名（3.1%）であった。子どもの人数は、1人28件（87.5%）、2人4件（12.5%）であった。また、対象とした子どもの平均年齢は、1.34歳（0歳7名、1歳21名、2歳2名、4歳3名、5歳2名）であった。

#### (3) 手続き

本調査に先立ち、子育て支援ネットワークの施設長に調査目的、方法、意義、守秘義務等について説明し、協力への承諾を得た。そして、この施設を通じて、対象となる母親41名に質問紙を配布し、32部回収した（回収率78%）。調査は匿名で行われることから、通常の同意文書の作成は不可能であり、回答することで調査への同意表明とみなされるものとした。

#### (4) 質問紙

母親の属性項目（年齢・職業・家族構成）と、育児受容感の項目から構成された。育児受容感については、「母親としての自分」、「子ども」、「子どもとの関係」、「母親を取り巻く環境」のそれぞれについて、数直線と自由記述によって回答を求めた。

具体的な質問項目は、数直線の場合「あなたは『母親としての自分』をどの程度受け入れていますか？また、満足していますか？下記の数直線にそれぞれ記入してください。」とし、10目盛の数直線上（0～100%）のいずれかに○を記入する形式とした。自由記述の場合は、「『母親としての自分』を振り返って見た時、自分のどのような点が好きだと思いますか？」というものであった。他の項目についても、ほぼ同様の文章で質問項目を作成した。いずれも受容感（どの程度、どのような点を受け入れているか）について問う項目であるが、項目によっては「受け入れている」という表現が倫理観に欠けるものであった。そのため、数直線では「母親としての自分」以外の対象に対しては満足度のみについて問い、自由記述では「どのような点が好きか」、「どのような点に満足しているか」という表現に置き換えた。

#### (5) 分析方法

数直線における回答については、平均値、標準偏差、相関係数の算出とt検定によって処理した。自由記述については、研究者2名がKJ法によって、回収されたすべての記述を分析した。その際、1人の母親が複数の内容を記載している場合は、それぞれ別の内容として1件数とした。

## 4. 結果

#### (1) 数直線による受容度・満足度の測定

「母親としての自分」に対する平均受容度は81.9%（SD=20.11）であり、平均満足度は

72.1% ( $SD = 24.85$ )であった。また、受容度と満足度について相関係数を算出したところ、強い正の相関が認められた ( $r = .75, p < .001$ )。さらに、受容度と満足度の間に対応のある  $t$  検定を行った結果、受容度の方が有意に高かった ( $t(27) = 3.13, p < .01$ )。また、「子ども」に対する平均満足度は84.0%、「子どもとの関係」に対しては74.2%、「母親を取り巻く環境」に対しては81.7%であった (表1)。

また、「母親としての自分」、「子ども」、「子どもとの関係」、「母親を取り巻く環境」の満足度間に対応のある  $t$  検定を行った。その結果、「子ども」、「母親としての自分」間 ( $t(27) = 2.43, p < .05$ )、及び「子どもとの関係」間 ( $t(29) = 2.42, p < .05$ ) において有意差が認められ、いずれにおいても「子ども」に対する満足度の方が高かった。

さらに、「母親としての自分」と「子ども」に対する満足度間で相関係数を算出したところ、有意な相関は認められなかった ( $r = .30, n.s.$ )。

表1 各満足度の平均値・SDと  $t$  検定結果

	N	平均 (SD)	$t$ 検定		
			子ども	関係	環境
母親としての自分 (満足)	28	72.1 (24.85)	*	<i>n.s.</i>	†
子ども (満足)	30	84.0 (14.76)		*	<i>n.s.</i>
子どもとの関係 (満足)	30	74.2 (20.60)			†
母親を取り巻く環境 (満足)	30	81.7 (16.83)			

(\*  $p < .05$ , †  $p < .10$ )

## (2) 自由記述による受容点 (好きな点、満足点) の検討

母親としての自分に対する受容点については、「精神面」、「行動面」、「関係性や価値観の広がり」、「精神と行動」、「時間のやりくり」、「その他」の6つの内容に大きく分類された (表2)。ここでは、「精神面」と「行動面」に関する記述が多く挙げられていた。

子どもに対する受容点については、「性格」、「存在自体」、「感情表現」、「健康状態」、「周囲からほめられる点」、「家族と仲が良い点」、「成長の実感」、「その他」の8つの内容に大きく分類された (表3)。ここでは、「性格」に関する記述が多く挙げられていた。

子どもとの関係における受容点については、「コミュニケーションの実感」、「言葉でのコミュニケーション」、「しつけ」、「子どもの反応」、「世話を通したふれあい」、「時間・距離感」、「遊びを通したスキンシップ」、「その他」の8つの内容に大きく分類された (表4)。ここでは、コミュニケーションに関する記述が多く挙げられていた。

母親を取り巻く環境における受容点については、「身近な人からのサポート」、「公的育児支援体制」、「その他」の3つの内容に大きく分類された (表5)。ここでは、「身近な人からのサポート」と「公的育児支援体制」に関する記述が多く挙げられていた。

## 5. 考察

### (1) 育児に対する受容度・満足度

「母親としての自分」に対する受容度や各対象への満足度はいずれも70%以上であり、本研究における母親の育児受容感が高いものであったといえる。これは、調査協力者が子育て支援ネットワークの利用者であり、育児に対して前向きに取り組む傾向があるためであると思われる

表2 母親としての自分に対する受容点

分類	内容
精神面 (9件—25.7%)	子どもがかわいいと思える (4)、成長を日々見られ、実感できる ところ (2)、愛しいと思える (1)、一緒にいることがうれしい・ 楽しいと思える (1)、子どもがいることで優しい気持ちになれる (1)
行動面 (9件—25.7%)	子どもと一緒に遊んであげられる (6)、子どもを外に連れて 行ってあげられる (2)、できるだけ手作りのおやつを作ってあげ られる (1)
関係性や価値観の広がり (6件—17.1%)	<価値観の広がり4件>他者 (他の子どもの親) の立場になって 物事を考えられるようになった (2)、価値観が広がった (1)、他 の子供に対しても優しい気持ちになれる (1) <関係性の広がり2件>他の母親と仲良くできる (1)、母親にな ったことで違う人との関わりや世界が広がる (1)
精神と行動 (子どもとの関係性) (4件—11.4%)	子どものことを最優先に考え、最優先にできるところ (2)、子ど もと一緒に遊んでいて2人で笑い合えた瞬間 (1)、とにかく子ど もが大好きで暇さえあればスキンシップをとっている点 (1)
時間のやりくり (2件—5.7%)	育児と自分のリフレッシュする時間を使い分け、子どもとの生活 を楽しんでいる (1)、家事と育児の両立 (1)
その他 (5件—14.3%)	好きなどころはない (1)、子どもが産めたこと (1)、勤めていた ときよりもストレスがない (1)、料理が上手なところ (1)、初め ての育児なのに自分なりにがんばっている (1)

表3 子どもに対する受容点

分類	内容
性格 (34件—44.7%)	<精神 (気質) 8件>やさしい (5)、明るい (1)、思いやりがあ る (1)、順応性がある (1) <行動26件>人見知りしない (7)、元気がいい (6)、よく遊ぶ (4)、活発なところ (2)、コミュニケーション (言葉や態度) を とろうとしてくる (2)、誰とでも友達になれる (2)、きちんと自 己主張する (1)、好奇心旺盛 (1)、友達と仲良く遊べる (1)
存在自体 (19件—25.0%)	笑顔 (6) ・泣き顔 (1) ・寝顔 (1) などの表情、存在すべてが 好き (3)、かわいい (3)、おもしろい (2)、いい子 (1)、癒して くれる (1)、笑い声・泣き声などの声 (1)
感情表現 (6件—7.9%)	<身体や言葉での感情表現3件>身体全体 (手足) で感情を表現 してくれる (2)、抱っこをせがむ (1) <必要とされているという実感3件>自分を頼ってくれる (2)、 自分がいないと不安になり泣く (1)
健康状態 (5件—6.6%)	健康なところ (2)、あまり病気をしない (2)、よく食べてよく 寝る (1)
周囲からほめられる点 (5件—6.6%)	「ありがとう」が言える (1)、言葉はまだしゃべれないがちゃん とお辞儀ができる (1)、「順番どうぞ」ができる (1)、周囲から ほめられるところが多い (1)、子どもに得意なところがある (1)
家族と仲が良い点 (3件—3.9%)	きょうだい仲がよい (2)、お父さん子 (1)
成長の実感 (2件—2.6%)	言葉を覚えて表現が豊かになってきた (1)、昔は引っ込み思案だ ったが今は積極的になろうとしている姿勢が見える (1)
その他 (2件—2.6%)	寝起きの機嫌がいい (1)、母親がわかる (1)

表4 子どもとの関係における受容点

分類	内容
コミュニケーションの実感 (6件—18.2%)	コミュニケーションがとれていると思う (2)、気持ちが伝わっている (2)、仲良し (1)、一緒に遊んだりする (1)
言葉でのコミュニケーション (6件—18.2%)	話ができる (3)、一緒に歌をうたう (1)、一緒に本を読める (1)、言ったことがなんとなくわかる (1)
しつけ (5件—15.2%)	しつけは大変だが楽しんでできている (1)、良いことをした時におもいきりほめてあげられる (1)、言うことを聞いてくれる (1)、注意をするとある程度わかってくれる (1) あいさつを必ずするように教えていて身についている (1)
子どもの反応 (5件—15.2%)	あやすと反応がある (2)、母親がいないと不安そうにする (1)、ママと呼んでくれる (1)、「ママ大好き」「ここに生まれてよかった」と言ってくれた (1)
世話を通したふれあい (4件—12.1%)	<スキンシップ3件>授乳によるコミュニケーション (2)、自分の胸でスヤスヤ寝てくれる (1) <その他1件>離乳食をあげるとき (1)
時間・距離感 (3件—9.1%)	一緒にいる時間を長くしている (2)、ある程度の距離がもてている (1)
遊びを通したスキンシップ (1件—3.0%)	チューしたり、だっこしたり、たくさんスキンシップがとれている (1)
その他 (3件—9.1%)	自分や周囲の人が子どもとたくさん真剣に遊んでくれる (1)、子どもの立場になって考えている (1)、思いつかない (1)

表5 母親を取り巻く環境における受容点

分類	内容	
身近な人からのサポート (28件—49.1%)	家族の協力 (19件)	<夫9件>夫が育児に協力的 (5)、夫が私の好きなことやリフレッシュをさせてくれる (3)、夫が出産に立ち会った (1) <その他の家族10件>自分の実家が近い (4)、お互いの両親の協力 (3)、お互いの親が子どもを可愛がる (1)、親戚が協力的 (1)、家族の協力 (1)
	友人の協力 (8件)	お母さん友達がいる (5)、地元の友人に相談できる (1)、友達ができて施設も利用できる (1)、友人の協力 (1)
	近所 (1件)	近所の人が子どもに会うと必ず声をかけてくれる (1)
公的育児支援体制 (25件—43.9%)	施設 (15件)	子育て支援センターがある (11)、児童館がある (2)、図書館の子ども施設が充実している (1)、家の近くにいろいろな施設がある (1)
	支援体制の機能 (10件)	友達ができた (3)、いざと言うときに相談にのってもらえる (2)、母親同士で情報交換ができる (1)、子どもが満足 (1)、同じ年頃の子どもと友達になれた (1)、育児支援体制 (2)
その他 (4件—7.0%)	趣味や仕事がある (1)、子どもだけでなく自分も大切に思っていると思う (1)、育児休業制度が徐々に良くなってきている (1)、子どもを支えてくれている人と関わりが持てている (1)	

る。あるいは、スタッフや他の母親たちからサポートを受けた結果、育児受容度が上昇しているとも考えられる。

また、「母親としての自分」に対する受容度と満足度との間に強い正の相関が認められたことから、母親は「母親としての自分」を受容しているほど満足もしているといえる。したがって仮説1は検証された。満足感とは、ある事柄を受容した後に、それに対し十分なプラスの評価をすることで生まれると考えられる。つまり、受容よりさらに肯定感の強い感覚であるといえる。しかし、正の相関関係は見られたものの、受容度より満足度の方が低かったことから、母親たちは「母親としての自分」を大体受容しているが、満足度となるとより厳しく自身を評価していることも示された。これは、「母親としての自分」や「子どもとの関係」に対する満足度、すなわち母親自身が関係する事柄における満足度は、母親自身が関係しない「子ども」満足度より低かったという結果からも窺える。また、各平均満足度を見ても、「子ども」、「母親を取り巻く環境」、「子どもとの関係」、「母親としての自分」の順に低くなっており、前者2つの事柄においては母親は直接関係しないが、後者2つには関係しており、母親のみに対する評価は最も低い。

これは、母親たちが社会における理想の母親像と自身の現実とを比較し、そこに何らかのギャップを感じていることが、理由の1つとして考えられる。女性の社会進出の増加に伴い、女性の生き方は多様となり、女性の家庭外におけるアイデンティティも強化されてきた。それは現代社会に広く認識されているが、男性のみならず、女性たちにおいても未だに理想の母親像というものが、「家事や育児を完璧にこなし、子どもを第一に考える」という理想にとらわれているためではないだろうか。瀬戸・大野(1993)は、母親の理想自己と現実自己の不一致が育児不安の一要因であることを示唆している。「母親としての自分」に対し、さらに満足度を高めるためには、母親たちに、理想像にとらわれない自分らしい育児について、好ましく評価できるように働きかけることが必要となろう。

また、「母親としての自分」と「子ども」に対する満足度間に有意な相関が認められなかったことから、仮説2は検証されなかった。したがって、本研究では、前述の大日向(1988)や山口他(2000)の結果とは異なる様相が窺えた。この結果より、両満足度は独立したものである可能性があり、各々別の視点からのアプローチが有効となる場合もあることが示唆された。

## (2) 自由記述による育児受容感の分析

### ① 母親としての自分に対する受容点

母親が「母親としての自分」に対して好ましいと思っている点は、「精神面」と子どもの世話や遊びを通じた「行動面」が共に一番多く、次いで「関係性や価値観の広がり」、「精神と行動」、「時間のやりくり」の順に多くみられた。「精神と行動」では、子どもとの関係において「とにかく子どもが大好きで、暇さえあればスキンシップをとっている」等の記述のように、気持ちを行動に表すもの(精神が行動へ)と、子どもと遊ぶ等の行動が愛らしい気持ちを喚起させるもの(行動が精神へ)という2種類があげられた。精神と行動の両方がともなう育児ができるということは、自分に対してポジティブな評価をする一要因であると考えられる。牧野(1981)は、「精神と行動」の不一致を育児不安の要因として概念づけているが、本研究における「精神と行動」の一致の感覚は、単に育児不安に関係づけられるだけでなく、母親自身の受容感とも密接に関わっていると考えられる。

また、「関係性や価値観の広がり」における「他の親の目線や立場に立って物事を考えられる」等の記述からは、施設のスタッフや母親同士の交流、他の子どもとの触れ合い等の他者との関係

性の広がり、自分自身の考え方や価値観に影響を与え、変化していくといった一連の流れが考えられる。そして、このように他者の見方や考え方を自分の内面に取り入れることによって、「他者（他の子ども）に対して優しい気持ちになれるようになった」、「子どもをあまり怒らなくなった」等のわが子を含めた他者への気持ちや行動の変化につながっていくと思われる。これらのことから、母親が人と関わる機会を持つことが自分自身の内面の変化（成長）に大きな意味をもたらすと考えられるため、このような他者との関係性を促進することも、母親自身の成長ひいては母親自身の受容感を高めるために必要なアプローチとなろう。

また、「時間のやりくり」において「育児と自分の時間の両立がうまくできることが好ましい」等の記述があった。これは、時間をコントロールできることが、自分に対してプラスの評価を生み出すと考えられる。さらに、自分リフレッシュする時間を設けることで、「新鮮に子どもとの時間を楽しめる」といった記述や、「子どもに対して優しい気持ちになれる」といった記述に見られるように、自分自身の精神面についてプラスの効果をもたらす可能性も示された。

## ②子どもに対する受容点

母親が「子ども自身（性格・情緒面、行動面等）」について好ましいと思っている点は、子どもの「性格」が一番多く、次いで「存在自体」、「感情表現」、「健康状態」、「周囲からほめられる点」、「家族と仲が良い点」、「成長の実感」の順に多かった。

「性格」では、優しい・思いやりといった子どもの精神面と、元気によく遊ぶ・人見知りしない・活発等の子どもの積極的な行動面を好ましいと感じていた。「存在自体」では、かわいさ、癒し、笑顔や笑い声のようなプラスイメージをもつ面だけでなく、泣き顔や泣き声といった一般的にマイナスイメージをもたらすような要因も含めて、ポジティブに捉えているというものであった。これらのことから、母親はわが子の存在自体を受容しているものの、性格においては優しさや他者に対する積極性といった点に対して、特にポジティブに捉えていることが窺える。このような子どもの性格は、他者と関わるようになるにつれ目立つようになり、「友達と仲良く遊べる」や「ちゃんと挨拶ができる」等の記述から、しばしば周囲からほめられ易い点となると考えられる。しかし、その他の性格特徴に対しても、ネガティブ視点だけでなくポジティブな見方もできるような働きかけをすることが、母親が受け入れにくいとする子どもの性格、ひいては子ども全体への受容を促すために必要であろう。また、「感情表現」に関しても、半数は「自分を頼ってくれる」等の母親への愛情を示すしぐさや言葉による表現が好ましいと述べている。Thomas (1968) は、子どもの気質の「扱いやすさ」が母親の子どもに対する愛着の高さと結びついている可能性を示唆している。本研究からは、子どもの好ましい性格特徴や母親への愛情表現が「扱いやすさ」と関係していることが考えられる。しかしその他の気質もまた、子どもの発達上欠かせないものであり、それらをポジティブに捉えられるようになることが必要といえる。

子どもの「周囲からほめられる点」についても、母親は好ましいと感じている。それは、子どもが周囲から認められるということが、母親にとって喜びであると同時に、自分の育児や自分自身についても認められたという感覚をも抱かせるからではないだろうか。そして、そのような感覚は母親の子どもに対する受容感のみならず、母親自身が自分を肯定的に捉える感覚にも、ポジティブな影響を与える可能性を示唆している。

「家族と仲が良い点」では、母親以外の家族とも良好な関係を築ける子どもに対して、母親は好ましいと感じている。そして、このような子どもと他の家族メンバーとの関係には、愛情



の相互関係があり、母親が育児がある程度他メンバーに任せられる状況であることが予想される。これにより、自分一人で育児を背負う等という負担感も減り、心理的にもプラスの感情がもたらされるのであろう。また、母親にとって最も近い存在となる家族から、子どもへ愛情を示す姿を感じられることは、「産んでよかった」等の自分に対して、また家族（環境）に対しても肯定的な感情を抱くことにもつながると考えられる。

### ③子どもとの関係における受容点

母親が「子どもとの関係」について好ましいと思っている点を記述件数順にみると、「コミュニケーションの実感」、「言葉でのコミュニケーション」が一番多く、次いで「しつけ」、「子どもの反応」、「世話を通したふれあい」、「時間・距離感」、「遊びを通したスキンシップ」の順に多かった。

「コミュニケーションの実感」における内容は、子どもとの関係を全体的に捉えた上での記述であった。これは、例えばスキンシップもするし、言葉によるコミュニケーションもとるというように、それぞれが独立しているわけではないので、母親の視点からすると自然な捉え方であると考えられる。「しつけ」においては、「大変だが楽しんでできる」、「ほめてあげられる」というように、自らのしつけについてポジティブに捉えていることを好ましく評価している内容と、しつけに対する子どもの素直さを好ましく捉えている内容であった。「子どもの反応」では、母親に愛着を示す反応に対して好ましいと感じている。また、「スキンシップ」を挙げた記述も多く、母親は子どもとの遊びや世話におけるスキンシップを好ましく思っていると考えられる。

さらに「時間・距離感」には、「子どもと自分との間に、ある程度の距離がもてていることが好ましい」という記述があった。これは、「自分や周囲の人が子どもとたくさん真剣に遊んでくれる」という記述より、子どもが、母親だけでなく他の人も遊ぶことができると、母親と子どもとの間に適度な距離感がもてるという可能性が窺える。適度な距離感は、母子間の過度な密着を防ぐ。母子が過度に密着している関係は、母親がわが子との関係や自らの育児に没入してしまい、周りが見えなくなって追い詰められてしまうという育児ストレスにつながる危険性をはらんでいる。佐藤（1991）によると、心にゆとりがある母親は、子どもの状態をよく掌握しており、子どもに愛着を感じているという。したがって、母親が、多少なりとも子どもと離れる時間を作るなどして、子どもとの間に適度な距離を設け、育児にゆとりを生じさせることは、育児ストレスの回避になり、子どもとの関係に好影響を及ぼし、関係性の受容につながると思われる。

したがって、関係性の受容を高めるには、子どもとの関わりに喜びや楽しさなどのプラス感情をもってもらうことと、子どもとの距離感について検討し、それぞれの母親に適度な距離感を意識してもらうことが効果的であると考えられる。

### ④母親を取り巻く環境における受容点

環境への受容点は「身近な人からのサポート」と「公的育児支援体制」に大きく分けられた。「身近な人からのサポート」では、家族（夫や互いの両親、親戚）の協力・友人の協力・近所の協力を分類され、夫が育児や母親自身の時間について理解があることや、育児に協力的な両親が距離的に近くにいること等があげられた。「家族の協力」において、記述の半数が夫の協力や夫との良好な関係という「夫」に関する内容であったことは、木村（2000）や近藤（2005）による、より良い育児環境の構築には、特に夫の援助や夫との良好な関係が重要であるという提言を支持している。協力してくれる友人には、お母さん友達をはじめ地元の友人等が挙げられていた。「公的育児支援体制」においては、家の近くに子育て支援センターや児童館、図書館等があるこ

とにより、母親たちは専門スタッフや他の母親達と交流や情報交換ができていたことが明らかになった。また、そのような施設では子供同士も知り合うことができ、母子ともに人との関係性が広がることについて好ましく思っている。水内・林・七木田（2000）は、子育て支援センターを利用する母親への意識調査から、支援センターは母親たちに場の提供のみならず、そこで知り合う他の母親やスタッフたちとの関わりを通して内面的・共感的サポートも提供していることを明らかにしている。つまり、人との関係性の広がり、母親自身の精神面に対する重要なサポート源となり得ると考えられる。

また、「友達ができて施設も利用できる」という記述から、お母さん友達がいることで、施設を利用しやすくなるとも考えられる。逆に、「身近な人からのサポート」が得られにくい人にとっては、施設を利用することで人との関わりが広がり、人的サポートが強化されることにつながるであろう。このように、身近な人との関わりと施設利用は密接に関係しており、双方が好ましい育児環境につながると思われる。

しかし、仕事をもっている等の理由で、施設を利用しにくい母親もいる。そのような母親は、支援体制から得られる家族外の人との交流、つまりお母さん友達等と互いに相談したり、情報交換をする機会が得にくい。したがって、今後支援体制の時間枠を拡大するなど、そのような母親にもより利用しやすい体制にしていくことが望まれる。または、電話やインターネットを通して専門家への育児相談ができ、お母さん友達とも知り合うことが可能であるということ認識し、利用することも解決策の1つであろう。これは、近所に施設がないという母親たちにも有効であると思われる。

全体的にみると、好ましい育児環境とは、人との関わりがある程度もてている状況であるといえよう。したがって、そのような育児環境が、「その他」の記述にあるような「子どもだけでなく自分も大切にしてもらっていると感じる」という母親のポジティブな思いにつながると考えられる。

## 6. 総合考察

本研究の調査協力者は、子育て支援ネットワークを利用している母親たちであった。そのため、「母親を取り巻く環境」における受容点の記述の約半数が、公的育児支援体制を支持している内容となったといえる。さらに、積極的に支援体制を利用していることから、育児に対して前向きに取り組む傾向があると考えられるため、育児に対する受容度や満足度が高かったと思われる。また、調査協力者の90%以上が専業主婦であったことから、仕事を持っている母親より、子どもと関わる物理的時間を長くとれるため、遊びや世話を通した関わりの中で「母親としての自分」に対する受容感が高まるという可能性がある。さらに、子どもの年齢が0～1歳に集中していたことから、「子ども」や「子どもとの関係」において、比較的母親が主体となって育児や世話をを行うことができることや、しつけにおいて困難さを感じる機会がまだ少ないということも考えられる。これらの協力者の属性の偏りが、結果に影響を与えた可能性は否定できないため、0～5歳児の母親全体に対する受容感の把握には、さらなる検討が必要であろう。

また、「母親としての自分」に対する受容度と満足度間に差が生じた理由の1つとして、双方について上下に並列させて回答を求めたことで、調査協力者にその違いをより意識させてしまい、それが回答に反映されたことが考えられる。さらに、本研究では育児受容感の要素として、一人

の人間としての自分に対する自己受容感も含めている。しかし、自己受容という概念はこれまで多く検討されてきているため、本研究では具体的な内容を検討していない。したがって、自己受容感に関しても先行研究をまとめ、育児受容感との関係やその役割を詳しく見出すことが必要であろう。

本研究では、育児受容感について把握するために、「母親としての自分」、「子ども」、「子どもとの関係」、「母親を取り巻く環境」という4側面に対する受容点を自由記述から調査した。その結果、側面は異なるものの共通した内容の回答もあり、必ずしも各側面は明確に分類できるものであるとはいえなかった。以下に、4側面に対する受容点の内容について総合的に検討する。まず、全記述を通し、育児受容感には、母親自身が行動したり、内面で生じた気持ち等を実感することで生まれるものと、他者との関わりがあることで生まれるものがあるということが明らかになった。したがって、母親自身の内面に対するアプローチと、他者との関わりを促進するようなアプローチが必要であるといえる。

具体的には、「新たな視点の枠組み」、「時間のやりくり」、「精神と行動の統合」、「ほめられる体験」、「関係性の広がり」に着目したアプローチ方法の有効性が示唆された。「新たな視点の枠組み」に着目したアプローチ方法とは、育児中に母親がネガティブに捉えやすいことに対しても、ポジティブな視点から捉えられるように、新たな考え方の枠組みを提案することである。「時間のやりくり」については、時間をやりくりすることで得られる物理的な余裕が、心理的ゆとりを生じさせたり、有能感をもたらすと考えられる。そのために、タイムマネジメントスキルや、子どもとの関係について検討する機会を持ってもらうこと等も有効であると考えられる。「精神と行動の統合」に関しては、自分の思いや考えを、子どもを始めとする周囲に対して矛盾なく表現できることが、育児場面における母親の内面の安定感へつながると考えられる。そのため、子どもや他者に対する表現方法のスキルを身につけることも有効であろう。さらに、「ほめられる体験」が母親にプラス感情を抱かせる可能性に着目し、ほめられることの重要性を再認識してもらうアプローチ方法も有効であると思われる。また、支援する側は、母親が「関係性の広がり」をいかに肯定的に捉えているかについて改めて認識する必要がある。そして、「関係性の広がり」を促進するために、様々な状況の母親でも利用でき、かつ興味を抱かせるような企画を提案していくべきであると思われる。

これらの事柄は、側面的に見い出されたものではなく、総合的に検討した結果得られたものであるため、4側面は明確に分類できるものであるとはいえなかった。したがって、アプローチは各側面それぞれに対して行うよりも、上記に挙げたアプローチ方法を組み合わせるなどして、包括的に働きかける方が効果的であろう。

今後の課題としては、育児受容感をより相対的に把握するために、育児を受け入れられないというネガティブな視点についても考慮する必要があると思われる。その上で、育児受容感尺度を作成し、本研究で見出されたこれらのアプローチ方法をより具体化していくことが挙げられる。

謝辞：本研究にご協力頂きましたお母様方、子育て支援ネットワークの皆様、ならびに文教大学人間科学部野島正也教授に心から御礼申し上げます。

#### 引用文献

平海光夫 (2006). 乳幼児健診で見られた育児不安の検討 生活科学論叢, 37, 31-37.

- 木村智子 (2000). 低年齢児の母親のより良い育児環境についての考察 日本保育学会大会発表論文抄録, 53, 332-333.
- 近藤仁史 (2005). 父親の育児支援の有無による母親の子どもに対する育児環境・育児態度の変化 臨床教育心理学研究, 31, 115.
- 厚生労働省 (2006). 平成17年度 児童相談所における児童虐待相談件数(速報値) 報道発表資料2006年6月 <<http://www.mhlw.go.jp/houdou/2006/06/h0629-4.html>> (2007年10月15日)
- 牧野カツコ (1981). 育児における<不安>について 家庭教育研究所紀要, 2, 41-51.
- 水内豊和・林千津子・七木田敦 (2000). 子育て支援センターを利用する母親の意識 幼年教育研究年報, 22, 61-69.
- 内閣府 (2007). 平成19年版国民生活白書 社団法人時事画報社, 106.
- 大日向雅美 (1988). 母性の研究—その形成と変容の過程:伝統的母性観への反証— 川島書店
- 大野裕・吉村公雄 (2001). WHO SUBI 手引き 金子書房
- Rogers, C. R. (1944). The development of insight in a counseling relationship. *Journal of Consulting Psychology*, 8, 331-341.
- (ロジャーズ, C.R. 伊東博(編訳)(1966). サイコセラピの過程 岩崎学術出版社)
- 佐藤貴美子 (1991). 保育に対する認識と母親の意識のあり方 聖徳大学研究紀要第一分冊人文学部, 2, 75-85.
- 瀬戸日登美・大野博之 (1993). 母親による子どもの見方と育児不安との関係性について 九州大学教育学部紀要, 38, 73-81.
- 清水嘉子 (2001). 育児環境の認知に焦点を当てた育児ストレス尺度の妥当性に関する研究 ストレス科学, 16, 176-186.
- 武井祐子・寺崎正治・門田昌子 (2006). 幼児の気質特徴が養育者の育児不安に及ぼす影響 川崎医療福祉学会誌, 16, 221-227.
- Thomas, A. (1968). *Temperament and behavior disorders in children* New York University Press, New York
- 上田琢哉 (2002). 自己受容と上手なあきらめ 梶田叡一(編) 自己意識研究の現在1 ナカニシヤ出版 pp.189-205.
- 山口茂嘉・森元真紀子・鈴木薫・丹治礼・大松孝子 (2000). 幼稚園に於ける子育て支援の基礎的研究 岡山大学教育学部研究集録, 113, 173-177.